

2012 年度 第 2 四半期 連結業績
国内機関投資家・アナリスト向けカンファレンスコール Q&A(要旨)

日 時: 2012 年 11 月 14 日 17:00～18:00

回答者: ソニーフィナンシャルホールディングス 専務取締役 渡辺 寛敏

ソニー生命 取締役 小泉 光廣

ソニー損保 取締役 丹羽 淳雄

ソニー銀行 取締役 鈴木 隆行

※内容については、理解し易いよう部分的な加筆・修正および QA 順序の並べ替えをしております。

【Q&A】

Q1. [ソニー生命]

2012 年度上半期の新契約マージンが 2011 年度年間に比べて減少した要因は何か？

A1.

金利低下が大きく影響している。

Q2. [ソニー生命]

2012 年度上半期の新契約マージンが 2011 年度年間に比べて低下したのは、主に金利低下の影響とのことだが、商品ミックスの変化の影響はどの程度あったのか？

また、今後の新契約マージンの動向はどう見ているか？

A2.

2012 年 3 月末に新契約価値へのセンシティブリティを開示しているが、新契約マージンの変動はほぼ金利変動の影響によるものとお考えいただきたい。

今後の新契約マージンの動向も、商品ミックスの変化ではなく、市場環境の変動による。

Q3. [ソニー生命]

経済価値ベースのリスク量が、2012 年 3 月末から 9 月末にかけて +417 億円(約 +7.5%)増加しており、これを年換算すると約 +15% の増加になるが、その要因は何か？

また、MCEV と経済価値ベースのリスク量について、ソニー生命として適正と考えている水準はどの程度か？

A3.

経済価値ベースのリスク量は、主に、保有契約の増加と市場環境の変動により増加する。

ソニー生命としては、経済価値ベースのリスク量が MCEV を上回らないことを基本スタンスとしており、現在の市場環境や資本規制動向を勘案すれば、現時点では妥当な水準だと考えている。

Q4. [ソニー生命]

2012 年度上半期の新契約高が前年同期に比べて減少しているが、家族収入保険の影響を除いて比較するどうか？

A4.

家族収入保険の影響を除くと、2012 年度上半期の新契約高は前年同期に比べて増加している。

2012年度上半期における家族収入保険の販売が対前年同期で減少しているのは、商品改定後の2010年度・2011年度における家族収入保険の販売の伸びが高かったためで、商品改定前と比較すると、むしろ販売は増加している。

Q5. [ソニー生命]

2012年度3Qでは、新契約の動向は増加に転じるのか？

また、嘱託ライフプランナーの新契約に対する貢献度はどの程度か？

A5.

2012年10月の新契約は前年同期に比べて伸びており、順調な滑り出し。

嘱託ライフプランナーの新契約における占率は非常に小さく、貢献度はそれほど大きくない。

Q6. [ソニー生命]

ライフプランナー在籍数について、今後は緩やかに増加していくと考えてよいのか？

また、当初計画に対して想定どおりか？

A6.

ライフプランナー在籍数は今後も増加トレンドが続くと見込んでいる。従前からご説明しているとおり、ライフプランナーの採用についてはさまざまな強化施策を実施しており、その効果が出ている。2012年度上半期の採用人数は前年同期に比べて二桁増加しており、足元でも順調に推移している。

当初計画に対しては、ほぼ計画通り進捗している。

Q7. [ソニー生命]

足元の業績は順調とのことだが、ソニー生命の開示資料中の「[共通質問](#)」において、2012年度の基礎利益の見通しが「やや減少」となっているのはなぜか？

A7.

下半期において変額保険にかかる最低保証の責任準備金の繰入を見込んでいることから、通期ではやや減少すると見込んでいる。

Q8. [ソニー生命]

2012年度上半期における、変額保険にかかる最低保証の責任準備金の繰入額はいくらか？

A8.

40億円。

Q9. [ソニー損保]

損害率の悪化が続いており、異常危険準備金の残高が減少しているが、今後、異常危険準備金の繰入率を上げるなど何か対策はあるのか？

A9.

主に料率改定によって損害率を改善し、異常危険準備金の残高の減少を抑えていくことを考えており、繰入率を上げることは考えていない。

Q10. [ソニー損保]

保険金単価の上昇について、担保種目別の影響を教えてください。

A10.

保険金単価の上昇が損害率に与えている影響としては、人損系と物損系ではほぼ同程度の影響となっている。個別に見ると、人損系では、対人の保険金単価は高止まりしており、人傷の保険金単価が上昇している。物損系では、年初来、対物、車両とも保険金単価が上昇を続けており、その要因としては修理費用の上昇や間接損害の増加が考えられる。

Q11. [ソニー損保]

損害率上昇の要因は、過年度に発生した事案における後遺障害等による高額の支払備金修正とのことで、前年度にご説明いただいた要因と変わっていないが、今後も変わらないのか？

A11.

以前は対人の損害率が上昇していたのに対して、現在は人傷の損害率が上昇している。今後の損害率について正確な見通しは難しいが、2012年度の損害率は高止まり状態が続くと見込んでいる。

Q12. [ソニー損保]

2012年度におけるシステム関連費用の増加について、上半期、下半期に分けてみた場合の見通しは？

A12.

2012年度上半期にリリースした新しいWebシステムの減価償却費負担と、BCP等セキュリティ関連のシステム拡充を進めていることなどにより、システム関連費用は特に下半期において増加する見込み。

Q13. [ソニー損保]

2012年度の経常収益の見通しを下方修正しているが、アンダーライティングの観点から、広告宣伝費を削減する予定はあるのか？

また、大手損保が実施している修理工場との提携のような、車両や対物における保険金単価の抑制に向けた施策は何か検討しているのか？

A13.

2012年度の経常収益の見通しについては、自動車保険の競争が厳しいことから上半期の正味収入保険料が当初想定を下回り、下半期もその傾向が続くと見込まれることから、下方修正した。広告投資を削減するというわけではない。ダイレクト損保各社間における広告投資の拡大や低価格での販売など、競争環境が厳しくなっている中で、ソニー損保では保険料の値上げが先行しているため、営業的には厳しい時期だと感じている。物損系の保険金単価の抑制に向けた主な施策としては、ソニー損保の持っている「S・mile 工房」という修理工場ネットワークの中で優良な工場への誘導率を上げることを既に実施しているほか、鑑定プロセスの強化・拡充による損害額の適正化を推進している。

Q14. [ソニー損保]

ダイレクト損保各社間における競争が激化しているとのことだが、今後の収益性の状況を鑑みて、保険料改定についてどのように考えているのか？

A14.

損害率の改善を最重要課題と考えており、2012年11月始期で料率改定を行い、数パーセントの値上げを実施したが、今後についても様子を見ながら追加の値上げを考える必要がある。

大手損保は毎年値上げを行っている模様で、大手損保に対してのソニー損保の価格競争力は変わっていないと考えている。ダイレクト損保間では、現時点ではソニー損保が先行して値上げをしているが、ダイレクト損

保各社の収益構造をみると、ダイレクト損保各社においても、今後値上げが必要な状況なのではないかと考えている。

Q15. [SFH]

今回発表した配当予想の1株当たり25円から配当性向を計算すると、30%に達していない。中期的な目標である配当性向30%～40%に対して、なぜこの配当予想としたのか？

A15.

中期的な配当方針に基づき、2012年度の通期連結業績予想および経営環境等を総合的に判断して決定した。

Q16. [SFH]

来年度以降の配当予想についても、2Q以降の開示となるのか？

A16.

来年度以降については、現時点で具体的に言えることは無い。都度、判断していく。

Q17. [SFH]

これまで配当予想を未定としてきた理由のひとつに、標準利率引き下げの影響が不透明であることがあったと思うが、今回、配当予想を決定したのは、影響の見極めが出来たからなのか？

また、来年度以降について、配当予想の決定プロセスに何か変化はあるのか？

A17.

配当予想を未定としてきた理由のひとつに、標準利率引き下げの影響が不透明であることもあったが、2012年度における影響は現時点では限定的と見ている。

来年度以降の配当予想については現段階では未定。

Q18. [SFH]

今後、金利が大きく変動した場合におけるJGBの価格変動は、US-GAAP上の損益に影響するのか？

A18.

ほとんど影響しない。

以 上